

モーツァルトの交響曲〔第 4 番〕ニ長調 K.19 開始部のミステリー

野口秀夫

1. はじめに

犬輔：交響曲〔第 4 番〕ニ長調 K.19 の自筆譜は残っていませんがレーオポルト・モーツァルトによる一揃いの筆写パート譜^{注1}がミュンヘンのバイエルン国立図書館に所蔵されていて、“1765 ロンドンにて”との日付が書かれています。

鳥代：この表記にもかかわらず、ニール・ザスローは『モーツァルトの交響曲』^{注2}において、この曲がロンドンに次ぐ滞在地オランダで——ハーグの宮廷楽長のグラーフ伝（づて）に——フィリップ・エマーヌエル・バッハの影響を受け作曲されたと示唆していました。ところがのちに『モーツァルト全作品事典』^{注3}ではロンドン作としたため、フィリップ・エマーヌエルの影響が宙ぶらりんになってしまうという論理の矛盾が生じています。

犬輔：それはともかく、演奏について奇妙なことに気付いたんだ。今までも第 1 楽章の開始部に異なった演奏があるのは知っていて、その原因が、LP 録音は旧全集による演奏、CD 録音は新全集による演奏だと大雑把に解釈していた。ところが、最近リリースされたフェレンツ・フリッチャイの放送録音集（1951-54）^{注4}を聴いてびっくり。それらのどちらでもない演奏だった。そこで旧全集を紐解いて二度びっくり。なんとフリッチャイの演奏は旧全集そのものだったんだ。

鳥代：どういふこと？ それでは従来の聴き慣れた LP 演奏は何によっていたと言うの？

犬輔：まさにそれを今日のテーマにしたいんだ。

教授：LP 演奏は旧全集の実用版による演奏だ。要は旧全集そのものと実用版の真正性が問題となる。それを明らかにするためにそれぞれの版を取り寄せて調べてみたまえ。

犬輔：でも肝心の実用版はすでに時代遅れの版なので入手が難しそうです。とりあえず LP からの聴き取りで楽譜を推定してみれば十分ではないでしょうか。

鳥代：調査は、現在演奏される最新の版から逆順に辿っていくのがよさそうね。

2. 新全集

犬輔：新全集はゲルハルト・アロッゲン Gerhard Allroggen (1936-) の校訂編集で 1984 に刊行されました^{注5}（ちょうど商用 CD の普及と同じ頃です）。開始部分を図 1 に示します。

Allegro Datiert: London 1765

The image shows a page of a musical score for the beginning of the first movement of Mozart's Symphony No. 4 in D major, K. 19. The tempo is marked 'Allegro' and the date is 'Datiert: London 1765'. The score is for the first 9 measures of the movement. The instruments listed are Oboe I, II; Horn I, II in E-flat; Violin I, II; Viola; and Violoncello/Bass. The dynamics are marked as forte (f) and piano (p). The score is in D major and 2/4 time.

図 1 新全集 交響曲 ニ長調 K.19 第 1 楽章 1-9 小節

鳥代：新全集で演奏しているのは確かに CD になってからの録音で、主にチャールズ・マッケラス^{注6}、トレヴァー・ピノック^{注7}、ジェフリー・テイト^{注8}、クラウディオ・シモーネ^{注9}、ヤープ・テル・リンデン^{注10}、アダム・フィッシャー^{注11}、ニコラウス・アーノンクール^{注12} などです。ファンファーレ風の開始が特徴だわ。

犬輔：でも、それがモーツァルトらしくないと感じる人もいますよ。そのためか、シモーネは1拍目を短めに、2拍目を長めに演奏して遠慮がちのファンファーレに仕上がっているね。

鳥代：シモーネはわたしに演奏を逆回転させたような眩暈（めまい）を感じさせるわ。堂々とファンファーレを鳴らさないと9歳のモーツァルトにしては元気が出ないわよ。

犬輔：アロゲンは序文でこう述べています。「シンフォニーの主題はこの版で初めてレーオポルト・モーツァルトの真筆で示された形で登場する。旧全集は1-2小節および5-6小節においてすべての楽器の1拍目の四分音符の後に無条件に [frei] タイを追加していた。ケツヘル目録のインチピットはこの独断的に [willkürlich] 変更された形であり、ヴィゼワ/サン・フォアのカatalogもこの変更された版を“第1主題は非常にリズムカルである”と言って採用している」。

鳥代：新全集の原典に対する忠実さ希求の姿勢がひしひしと伝わってきます。それにしても、旧全集への言及がなされているのは珍しいですね。多くの新全集編集者は旧全集については黙殺することが常でしたから。

犬輔：「タイの追加」は旧全集の楽譜だけでなく、LP 演奏からも聴き取られますから、次に旧全集の実用版楽譜を見ていきましょう。

3. 実用版（旧全集に基づく）

犬輔：実用版として中央公論『モーツァルト大全集』^{注13}には B&H, Partitur Bibliothek, 71^{注14} と Ricordi: Mozart-Sinfonie Vol. I (P. R. 776) とがリストアップされており、現在 B&H 社のサイトには図2の貸譜が、またアマゾン・フランスのサイトには図3の販売譜が載っています。ただし、両者とも求めている実用版なのかどうかは不明です。

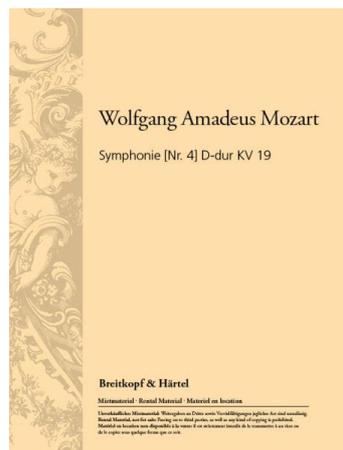


図2 交響曲 二長調 K.19 B&H 社

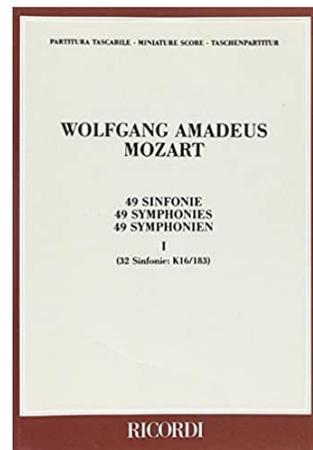


図3 交響曲 二長調 K.19 他 Ricordi 社

鳥代：でも犬輔さんが LP から聴き取った楽譜を示してくれるのでしょうか。

犬輔：はい、お任せを。多分、実用版は図4のように書かれているものと思われます。

Allegro.
a. 2.

Oboi.

Corni in D.

Violino I.

Violino II.

Viola.

Violoncello e Basso.

Allegro.

図4 旧全集に基づく実用版（推定） 交響曲 二長調 K.19 第1楽章 1-6小節

鳥代：そのようにタイが追加されているのね。

犬輔：LP 録音の代表的な演奏はギンター・ケール^{注15}、エーリヒ・ラインスドルフ^{注16}、ジェームズ・レヴァイン^{注17}、カール・ベーム^{注18}、ネヴィル・マリナー^{注19}、クリストファー・ホグウッド^{注20}などです。

鳥代：この楽譜では完全なファンファーレ音型とは言い難くなるわね。しかもこの方がモーツァルトらしいリズムだとも言い切れないわ。

犬輔：ぼくもこの楽譜のように演奏される LP 録音では靴底に泥濘（ぬかるみ）がへばり付いてくるような感覚になるんだ。しかもブーツ、ブーツばかりが聞こえるんだね。

教授：今から 60 年ほど前、関東広域圏ラジオ局の文化放送に産経新聞提供『産業ニュース解説』という番組（朝 6 時 35 分）があり、そのテーマ音楽^{注21}として流れていたのを覚えている。それはこの楽譜どおりの演奏だった。お固い解説番組の開始にはぴったりだったよ。

鳥代：ホグウッドの演奏は面白いわ。楽譜面（づら）からファンファーレがテーマと読み取ったホグウッドは——相談役のザスローの助言を受けてのことと思われそうですが——タイをそのままに、ホルンの十六分音符を前打音的に扱って独特のファンファーレに仕上げているの。

教授：演奏で楽譜校訂の必要性を訴えているいい例だね。

犬輔：では次に問題の旧全集の楽譜を見ていただきましょう。

4. 旧全集版 (1879)

犬輔：旧全集は B&H 社から 1879 にモーツァルト作品シリーズ VIII 交響曲第 1 巻、第 4 番^{注22}として発行されました（図 5）。

図 5 旧全集 交響曲 二長調 K.19 第 1 楽章 1-6 小節

鳥代：タイの使用は実用版と同じだけれど、よく見ると 5 小節目の Vn. I と Vn. II のメロディだけ他の楽器と異なっているわ。大胆にも小節の前半と後半を交換させているのね。

犬輔：新全集序文にも言及がなく、なぜそうしたのかミステリーなんだ。第 1 拍が 2 音（d', d''）からなっていて、タイが片方の音（d'）だけに付くことをよしとしなかったからだろうか。

教授：和音の一部だけにタイが付けられるのは音楽的には問題とならない。一方で 5 小節と 6 小節にわたる BAAB の回文的メロディの混入は積極的なメッセージを期待させるものだ。因みにのちの 12 音技法では音列の逆行型、反行型、逆反行型が定義されている^{注23}。

鳥代：そんなに時代を下った難しい例を探さなくても、反行型メロディの積極的適用はベートーヴェンに例があったわね。

図 6 ベートーヴェン ピアノ・ソナタ 第 20 番 ト長調 Op.49-2 第 2 楽章 1-3 小節

犬輔：ベートーヴェンは反行型メロディを動機として採用し（図 6）、さらに七重奏曲 変ホ長調 Op.20 の第 3 楽章に転用しているくらいだから積極的な適用と言えるんだね。

鳥代：翻って旧全集では、Vn. I と Vn. II のメロディだけ他の楽器の ABAB と異なる BAAB というのはメッセージ性がなく、聞いていて座りが悪いと感じるだけに終わってしまうわ。

犬輔：フリッチャイの演奏を聴いて感じたのはまさにその座りの悪さです。5小節目で突然新全集のリズムが変わったのではないかという錯覚さえ起こってしまいました。

鳥代：フリッチャイは実用版の演奏を知っていた筈です。にもかかわらず、敢えて旧全集にこだわったのはなぜなのでしょう。それこそミステリーでは？

教授：その時点で最も信頼性が高い版を使うという信念があったからではないか。

犬輔：音楽的問題よりも信頼した版を優先した…。それは立派だと思いますが…。

鳥代：音楽的に問題がある旧全集そのものを修正する動きはなかったのでしょうか^{注24}。

教授：そのために新全集が待たれたのではなかったかね。

犬輔：お騒がせな旧全集だ！

5. まとめ

教授：もう一度発行順に第 5-6 小節をチェックしておこう。オリジナルの形態は —— 新全集が正しいと信じて —— 新全集の楽譜通りとしておく。

オリジナル

旧全集

旧全集実用版

新全集

- ① タイを追加
- ② メロディの前半と後半を交換
- ③ 楔形スタッカートを削除
- ④ メロディを元に戻す
- ⑤ タイを元に戻す
- ⑥ 楔形スタッカートを元に戻す

図 7 各版の交響曲 二長調 K.19 第 1 楽章 5-6 小節

犬輔：この部分だけで 6 回もの校訂を介してやっと新全集が成立しているんですね。

鳥代：教授は「新全集が正しいと信じて」という但し書きを付けました。わたしもオリジナルのファクシミリがない限り全面的には信じられないと思っています。

犬輔：具体的に何か気になることでも？

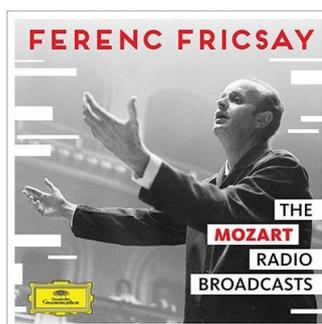
鳥代：ええ、スラーの有無の問題よ。図 7 でスラーは例外なく付され続けていますが、果たしてオリジナルは明示的なのでしょうか。というのも 9 小節目の Va. & Bs. の同じリズムの音型にはスラーがないので一貫していないからです。不要なのでは？



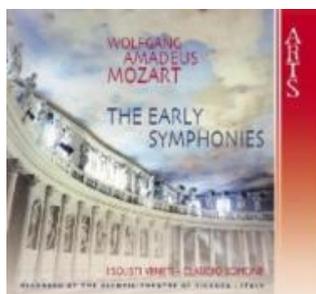
図 8 交響曲 二長調 K.19 第 1 楽章 9 小節

教授：なかなか鋭い着眼だ。バイエルン国立図書館を訪問してレーオポルトの筆写譜における表記の一貫性を調査してみたいものだね。そのときまで鳥代さんの代案提起を記憶にとどめておくこととしよう。

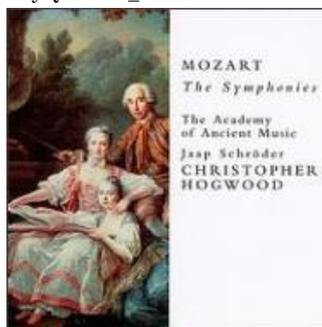
- 注 1 : Bayerische Staatsbibliothek Munchen, Musikabteilung, Signatur: Om. 379' (alte Signatur: MSS. Music. /583)
 注 2 : Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies: Context, Performance Practice, Reception. Oxford: Clarendon Press, 1989
 注 3 : ニール・ザスロー、ウィリアム・カウデリー編/森泰彦監訳『モーツァルト全作品事典』音楽之友社 2006
 注 4 : モーツァルト放送録音集 1951-54 フェレンツ・フリッチャイ&ベルリン RIAS 交響楽団 (4CD) DG Deutsche Grammophon < <https://www.youtube.com/watch?v=YlureiJZC90> >



- 注 5 : NMA IV/11/1: Sinfonien • Band 1, Notenedition (Gerhard Allroggen, 1984)
 注 6 : 交響曲全集 マッケラス&ブラハ室内管弦楽団 (10CD) Telarc (1986~90 年デジタル録音)
 注 7 : 交響曲全集 (48 曲) ピノック&イングリッシュ・コンサート (11CD) DG ARCHIV COLLECTORS (1992~1995 年デジタル録音)
 注 8 : 交響曲全集 テイト&イギリス室内管弦楽団 (12CD) Warner Classics (1993 年、1995 年)
 注 9 : 初期交響曲集 シモーネ&イ・ソリスティ・ヴェネティ (4CD) Arts (1991,1994,1996,1998 年デジタル録音)
 < <https://www.youtube.com/watch?v=vsXikM1ZPW4> >



- 注 10 : 交響曲全集 (41 曲) ヤープ・テル・リンデン (11CD) Brilliant (2001&2002 年デジタル録音)
 注 11 : 交響曲全集 アダム・フィッシャー&デンマーク国立室内管弦楽団 (12CD) Dacapo (2006 年 6 月-2013 年 2 月デジタル録音)
 注 12 : 初期交響曲集 アーノンクール&ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス(7CD) Ariola Japan (1990 年 12 月、1999 年 12 月、2000 年 12 月録音)
 注 13 : 『モーツァルト大全集 特別付録 モーツァルト全作品目録——年代順主題解説—— I 1761~1769』中央公論社 1976
 注 14 : Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts, 6. Auflage, Wiesbaden 1964, Hrsg. von Franz Giegling, Alexander Weinmann und Gerd Sievers (ケッヒェル目録) には B&H, Partitur Bibliothek, 87 とある。
 注 15 : モーツァルト: 交響曲集 (マインツ室内管/ケール) Vox Box
 注 16 : 交響曲全集 ラインズドルフ&フィルハーモニック・シンフォニー・オブ・ロンドン (8CD) Dg Om (1955-56 年録音)
 注 17 : 交響曲全集 レヴァイン&ウィーン・フィル (11CD) DG COLLECTORS (1984-1990 年録音)
 注 18 : 交響曲全集 カール・ベーム&ベルリン・フィル (10CD+ブルーレイ・オーディオ) DG [1959 年 (第 32、35、38 番)、1961 年 (第 40 番)、1962 年 (第 41 番)、1966 年 (第 31、34、36、39 番)、1968 年 (その他すべて)]
 注 19 : 初期交響曲集 マリナー&アカデミー室内管弦楽団 (4SACD) Pentatone Classics (1972 年~1973 年録音)
 注 20 : 交響曲全集 ホグウッド&エンシェント室内管 (19CD) DECCA COLLECTORS (1978 年 9 月-1985 年 8 月録音) < https://www.youtube.com/watch?v=yQx5iWU_CPk >

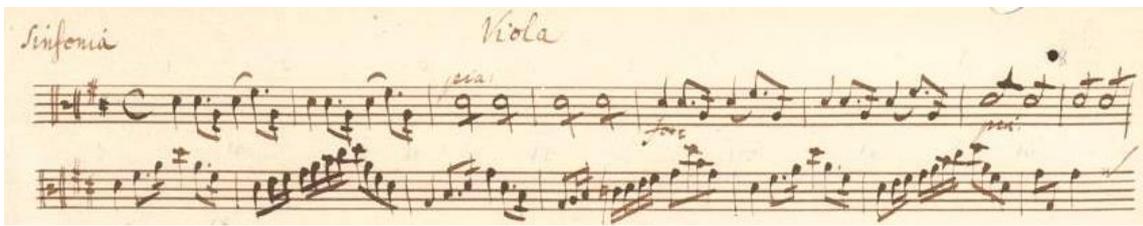


- 注 21 : 当時の文化放送は毎朝 7 時 50 分からの山叶証券提供『ニュース・ロータリー』でドイツ舞曲 K.605-2 をテーマ音楽に、毎週金曜日夜 9 時からの『東急 ゴールデン・コンサート』では《レ・プティ・リアン》K.299b から「パントマイム」をテーマ音楽に、さらに同番組中での東京急行電鉄のイベント案内アナウンスのバックに《魔笛》K.620 第 1 幕フィナーレのグロッケンシュピールの旋律を流すなど、モーツァルトへの傾倒が顕著であった。
 注 22 : Mozarts Werke, Serie VIII: Symphonien, Bd.1, No.4 (pp.1-10 (37-46)), Gustav Nottebohm, Carl Reinecke, Paul Waldersee, First edition, Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1879
 注 23 : Wikipedia : 十二音技法
 注 24 : 参照している旧全集は第 1 版であり、第 2 版以降で改訂されている可能性があるが、調査は及ばなかった。

(2020 年 11 月 8 日作成、2020 年 11 月 13 日改訂)

後日の談話室

犬輔：懸案になっていたバイエルン国立図書館のデジタル・ライブラリーにアクセスすることができたので報告します。レーオポルト・モーツァルトによるパート譜 MSS. Music. 1583 です。各パートの最初の部分を示しましょう。



鳥代：1音目と2音目の間にタイがないことは明白です。でも3音目のスタッカートはバスのみに付けられていて、ヴァイオリンやヴィオラには付いていません。新全集では何の断りもなくすべての声部に付けられていますが原典に忠実と言えるのでしょうか。

教授：新全集（図1）のスタッカートをよく見てごらん。バスには大きく、ヴァイオリンとヴィオラには小さく印刷されていることが分かる。新全集における編集者の追記は、イタリック体、破線、あるいは小さく印刷して区別することになっている。

鳥代：分かりにくいですね。オリジナルを知らなければ誰も気が付かない差だわ。もっと小さく印刷してほしいわね。

犬輔：鳥代さんが指摘した4音目と5音目の間にスラーがあるのに、9小節目のヴィオラやバスの類似音型にはスラーがついていないという件ですが、これはレーオポルトの手稿譜でも同じであることが分かりました。一貫性に欠けるという問題は引きずったままです。

鳥代：9小節目のヴィオラやバスにはスラーがないだけでなく、スタッカートもないのね。

教授：多声音楽であれば各声部は対等だから一貫性という議論も意味があるが、この曲は和声音楽であるから主旋律と伴奏というパート割ゆえに一貫性が問われるものではないであろう。

犬輔：伴奏だけがスラーやスタッカートを奏する部分があるという方が奇妙だということですね。



図9 à London 1765 と記載ある 1 ページ目

(2021年6月3日作成)